

拙論「マルクス主義的唯物論の変貌とヘーゲル・マルクス関係の再検討」について

島崎 隆

上記拙論については、会員の岩佐さんから丁寧なコメントを頂いた。「論文の主題」については、とくに「マルクス・レーニン主義の呪縛」からの解放という点で、スターリンの問題点の大本がすでにエンゲルスとレーニンに胚胎していたという私の叙述について、とくにレーニンについてはその「両義性」があるとコメントされた。ぼくもその点はそう考えており、彼らのポジとネガをきちんと把握しなければならないと思う。またエンゲルスについても、西欧マルクス主義などが厳しく批判してきたことの意味を検討すべきである。それらの点については、ぼくは『ポスト・マルクス主義の思想と方法』という著作で詳細に展開した。また、レーニン『哲学ノート』に由来する弁証法・論理学・認識論の三者の同一性については、おそらく岩佐さんとぼくの間では、意見の差異があるようだ（その点で、岩佐論文「ロシア・マルクス主義哲学をどう見るか」、『労働者教育』第153号、2015年を参照）。ぼく自身は、この点では、レーニンはこの見解をヘーゲル論理学の読解から直接引き出しており、ヘーゲル論理学がそれ自身、弁証法でもあり認識論でもあるという趣旨で、三者の直接の同一性を主張したと考えている。ともかく、こうした認識論的かつ方法論的議論がマルクス主義[哲学]の第一の問題であるという考えは、実践的唯物論が厳しく批判したものである。従来のマルクス・レーニン主義では、その理論的欠陥の問題とともに、その哲学が聖典化され、党と国家の唯一の哲学となり、異論を許さないという意味で、多くの非難と粛清を招いたということである。近代市民社会で当然の思想と表現の自由という問題が、社会主義（党と国家）でどう受け止められるべきかという問題が未決のまま残っている。さらに報告では、ヘーゲル的観念論については、その Idealisierung（観念化すること）という事態の重視が弁証法と癒着したということを強調した。「観念的」「観念論」ということが、たしかに究極的には「非合理的」「宗教的」「神秘的」という特徴に帰着するにしても、そのヘーゲル観念論がなぜ「弁証法」というすぐれたものを生んだのかを説明すべきである。マルクスの唯物論の成立根拠については、『ドイデ』などにそって簡潔に述べたのみであった。エンゲルス『フォイエルバッハ論』における「哲学の根本問題」については、それを正しく世界観的と解釈して、上記のマルクスの唯物論（実践的唯物論）の議論のあとに受け入れる余地があると思っている。そのさい、東独でかつて活発に論じられた主体・客体の弁証法は、正しいものだと思うが、実践的唯物論のなかでさらに豊かに展開されるべきである。